

【問題】	【POINT】
江戸時代の飛脚3つ	●幕府公用の 継飛脚 ●大名が江戸と国元間に置いた 大名飛脚 ●民間営業の 町飛脚
大名貸を説明せよ	●江戸時代、商人が大名を相手に行なった金融。江戸時代初期から藩財政が窮迫してきたため、諸藩では、領内や三都（江戸、京都、大坂）の有力商人からの借財で藩の経営を維持●当初は素貸であったが、元禄以降、踏倒す大名が多くなったため、米や藩の産物を抵当に貸付けた●踏倒して倒産する者もいたが、藩財政を掌握して利益を得る者も
拝借金を説明せよ	●江戸幕府が財政支援のために、大名・旗本などに無利子に貸与した金銭●居城の罹災や領内の災害・凶作、勅使や朝鮮通信使への接待などの幕命による御用遂行、転封、幕府の役職就任（京都所司代や大坂城代、遠国奉行など）などに拝借金が貸与された● 拝借金は幕藩体制維持のためには必要な措置であったが、同時に幕府財政を悪化させる要因になった
暖簾分けを説明せよ	●商家の奉公人が本家から別家すること●番頭、手代は長年にわたって本家に奉公することによって、その報奨として別家をもたせてもらうことができ、暖簾分けと称して本家の屋号を使うことを許されたり、仕入れや得意先を分けてもらうなどの特典●別家は本家に対して独立後も奉仕しなければならない反面、危機に際しては本家から庇護や援助を受けることができる ※ 丁稚→手代→番頭
辻番を説明せよ	●江戸時代、おもに城下町に設けられた治安維持のための施設。辻番所を設け、辻番人を置いた当初は武士が勤めたが、次第に町人の請負人に委ねられた●近世後期には、請負人が利益追求のために不適任者を置くことが多く、機能は低下していった。
町の住民構成とその変容	●町の住民は商工業者が中心で、町屋敷を持つ 家持 、持たない地借や 店借・借家 で構成され、 家持 のみが正式な町の構成員●江戸時代後期には大店を構える 豪商 が 町屋敷 を集積し、それに伴って家持が減少することで町は共同体としての機能は低下●離農者が流入して 日用 に従事して 裏長屋 に住む 貧民 が増加●貧民層は飢饉などを原因とする物価の騰貴に呼応する打ちこわしの担い手として地域秩序を動揺
江戸時代の農村で商品作物の生産や手工業が発達した理由	●兵農分離と参勤交代制による武士の都市集住⇒消費需要の増大をもたらし、 全国的な流通網を整備 ●耕地面積の拡大・農業技術の発達による 農業生産力の向上 を背景に、商品作物生産や農村家内工業による商品化が推進された。
玉川上水を説明せよ	●江戸時代、飲料水として多摩川の水を引いた上水路● 神田上水 と並ぶ 二大上水 の一つ●近代水道整備後も淀橋浄水場への導水路として利用
地主手作（自分もやる、補うだけ）が挫折し貸付地主が主流になった理由	●地主手作では、労働力の賃金が農産物価格を上回り、また地主手作が他の小農経営より高い生産性を発揮できるような農業技術は無かった。
干鰯による他地域における生産力の発展と農家への影響	●大坂へ廻送され、大坂周辺での綿花・菜種栽培などの商品作物の栽培で即効性に富む 金肥 として利用● 金肥の価格上昇 が農業経営の収益性を圧迫した

	※近代には魚肥・大豆粕や 硫酸 などの 化学肥料 が用いられるようになった。
後家倒しとは何か	●(後家の仕事であった稲こきを取りあげて失職させたところから) 千歯扱きの異称
近世社会において農書が果たした役割	●豪農層を中心とする識字率の向上を背景として、新しい農業技術を広範に伝達し、農業生産力向上に貢献●小農経営に適応した集約型の農業技術を流布させ、さらに商品経済活発化に対応した農業経営への転換をはかるノウハウを提供
村請制の内容を説明	●中世の惣村の 地下請 が近世でも継承●検地によって確定された村全体の石高である村高を対象として幕藩領主によって年貢が賦課され、村役人の責任のもと、村全体で年貢が納入
赤穂事件とそれに関する論争を説明せよ	●旧赤穂藩士の 大石良雄 らが、 吉良義央 の邸内に乱入して義央の首級をあげて、旧藩主 浅野長矩 の仇をはらした事件●浪士らの処分について、その拳を忠義とするか、罪とすることをめぐって將軍から庶民まで巻き込んで、江戸時代最大の論争に●林大学頭信篤や 室鳩巢 らは復讐を義とする考えから彼らを義人とみだが、一方で佐藤直方らはこの論に反対した● 荻生徂徠 は、私論では忠義、公論では罪人とみてその義人、義士論を批判●この事件は「忠臣蔵」として民衆に愛好された
18世紀以降に西陣や桐生の絹織物生産が飛躍的に発展した理由	●都市の発達に伴って消費生活が拡大で絹織物の需要が増加●北関東を中心に養蚕が盛んとなり生糸生産が拡大
縁切寺を説明せよ	●江戸時代、妻がそこに駆け込み、一時在住すると離婚できた尼寺●中期以降は鎌倉の東慶寺、上州の満徳寺に限定 ※三従の教・七去 ※三行半(離縁状)(夫から妻へ)
ちよぼくれを説明せよ	●江戸時代の大道芸で、願人坊主などが鈴などを振りながら歌をうたって米銭をこたもの
御救小屋とは	●近世に飢饉、火災などの災害時、貧窮の罹災者を収容する目的で建てられた仮小屋●貧窮者の市街浮浪を抑止するため、その全生活を管理する御救小屋と、飯米の一時的施与のみを目的とする 炊出し小屋 に分化
中世と近世の一揆の相違点	●中世… 国人 が在地領主として自立的な支配力をもつ一方、百姓が自治村落である 惣村 を形成し、名主のなかには武士身分を獲得して 地侍 も存在。国人・地侍や百姓、さらには飢饉時に都市に流れ込んだ 貧民 に至るまでの 様々な身分の人々が階層ごとや階層を超えて多様な一揆 を結び、また、仏教をよりどころとし、浄土真宗本願寺派の門徒である 国人・地侍や百姓らによる一向一揆 や日蓮宗信者である京都の富裕な商工業者による 法華一揆 などの 宗教一揆も存在 ●近世… 兵農分離が進んで武士が城下町に集住し、寺院は統一権力の統制のもとで民衆支配の末端を担い キリスト教も 鎖国 などを通して 排除 されたため、武士や宗教勢力を担い手とする一揆は 島原の乱 を最後として消滅。村請が採用されて村々の自治は保証され、百姓による一揆だけが存続
江戸時代に多くの百姓が後に非農業部門に進出していった税制	●土地に賦課する年貢の比重が圧倒的であったため、農業以外の生業に従事するほうが税制上有利
米の大坂への年間入荷量の変化	●江戸時代、諸藩には石高制の下、米納年貢を 経済基盤 としており、大坂には多くの諸藩

	<p>が年貢米換金のために蔵屋敷を設置していたため、18世紀前半から19世紀前半ではほぼ一定の米が入荷●廃藩置県で蔵屋敷が撤去され地租改正で金納地租が導入されて農民が地方市場で米を換金するようになり、19世紀末では激減</p>
綿花の大坂への年間入荷量の変化	<p>●18世紀初期から木綿が庶民衣料として普及して綿花栽培が広がり、大坂の間屋商人が綿花を集荷したため19世紀初期では激増した●地方市場の成立と在郷商人の台頭、藩専売の強化により大坂の中央市場としての機能が低下し、19世紀半ばでは激減●開港以降、綿織物、綿糸が大量に輸入されたため、綿花需要が減退し、19世紀末ではさらに激減</p>
借り上げを説明せよ	<p>●江戸時代、各藩で財政に困窮して、家臣から借りる形式で、俸禄を減らしたこと</p>
米価政策としての買米令と御用金令との比較	<p>●共通点…米穀の流通量を減少させることで米価の引上げをはかる点●相違点…前者は富裕町人らが幕府から指示された量の米を購入・保有、後者は町人・農民から徴収した御用金を使って幕府みずから米の買上げを行う</p>
田沼時代～幕末までの三都における幕府の仲間政策	<p>●田沼意次…仲間を広く公認し、運上・冥加の増収と流通統制を図った●化政期…在郷商人が地方市場を結ぶ新たな流通網を形成する中、流通の自由を求める国訴が起こると幕府は仲間の独占を緩和●天保期…仲間の集荷力の低下で物価が上昇したが、仲間を解散させて逆効果となり、後に再興●幕末期…開港で在郷商人が商品を横浜に直送し流通が混乱すると、幕府は仲間の保護と物価統制ならびに貿易統制のために五品江戸廻送令を出したが効果はなかった。</p>
産物会所の内容と背景	<p>●江戸時代中期以降、殖産興業政策や各地の特産を専売するために設けられた諸藩の機関●貢租収入を中心とする藩財政は、商品経済の発展に対応できず窮乏状態に陥ることが多く、その打開策として、各地で生産される米以外の特産物を藩や御用商人が一手に集荷して藩外への販売を行い、その利潤で財政の建直しを企図●藩営専売制度を設けて流通独占による利益を得ようとし、百姓一揆の対象となり、価格騰貴を引起して市場を攪乱</p>
義民の例を2人	<p>●佐倉惣五郎(木内宗吾)、礒茂左衛門</p>
惣百姓一揆の具体例	<p>●伝馬騒動</p>
全藩一揆を4つ	<p>●松木庄左衛門らの一揆・礒茂左衛門らの一揆・元文一揆・郡上宝暦騒動</p>
18世紀半ば以降の幕府の財政難とその対策	<p>●財政難の原因⇒農民の階層分化による本百姓体制の動揺や諸色高米価安●田沼時代…銅座・人参座などの座を設けたことによる専売制の強化や株仲間の積極的公認で運上・冥加を増長するなど、年貢増徴だけに頼らず、商品生産やその流通に新たな財源を見出す●寛政の改革…出稼ぎ制限や帰村を奨励する旧里帰農令を出し、農村人口の回復を目指した。</p>
17世紀半ばの政策と、寛政・天保の改革の飢饉対策の性格の違い	<p>●17世紀半ば…田畑永代売買禁止令など、本百姓体制の維持が図られた●寛政・天保の改革期…貨幣経済が浸透して農民層の分解が顕著となっており、江戸に流入した農民の帰農が促されるなど荒廃した農村の復興が目指された。</p>
戦国時代と江戸時代に飢饉が頻発した理由	<p>●戦国時代…戦乱が起こると、農村は戦力・軍事のための労働力として農民を提供しな</p>

	<p>ければならず、たびたび生産のための労働力を奪われ、兵糧確保の手段、敵方に打撃を与えるための戦術として刈田が横行し、戦乱のたびに農村に打撃●江戸時代…収穫した米が必ずしも生産地で消費されず、諸藩は年貢米を換金するために蔵屋敷を置いた江戸・大坂に送ってしまい、年貢米以外の収穫米も商人がより高い利益を求めてことごとく大消費地である江戸・大坂などの領外に売却することが多かった</p>
<p>防長大一揆を説明せよ</p>	<p>●長州藩領内で起きた百姓一揆で同藩の天保改革の契機となった●藩は産物会所を開設して百姓の商品作物を藩の統制下に置く施策をとっていたが、特権的な御用達商人と百姓の紛争を発端に一揆が起きた●一揆勢は、紙・蠟などの商品流通の統制排除、年貢の軽減、村方行政の改革などを要求、これに対して村田清風は産物会所および専売制の廃止などを回答して切り抜けた</p>
<p>藩政改革で専売制度を強化しても結局自立できない理由</p>	<p>●諸藩が元々、蔵屋敷を設けて蔵物を販売していた大坂・江戸は幕府の直轄都市であり、問屋が幕府から株仲間結成を公認され、流通を掌握していたため、専売制度を実施しても藩外への販売では幕府主導の市場構造に依存せざるを得なかった</p>
<p>江戸時代後期における、魚市などの専門市の特徴や役割</p>	<p>●問屋・仲買と小売商人との売買の場である卸売市場でもあり、都市と農村を結ぶ経済の中心としての役割を果たした。</p>
<p>江戸地廻り経済圏の形成過程を説明せよ</p>	<p>●成立当初の江戸は、その消費を支えるだけの近郊地帯を持たず、下り荷は関東の生産品に対して比較的高度の技術を要する加工品が多かったために、幕府の市場政策も初めは大坂に依存する度合いが強かった●近世中期以降になると関東やその周辺では、江戸市場目あての生産が高まり、下り荷への依存度は低下し、銚子・野田の醤油や八王子・秩父の絹織物などが生産された●江戸地廻り経済圏の形成過程で、江戸送りのために生産物を集荷し、江戸からの商品を配給する機能をもつ在方町が圏内の各地に成立し、在郷商人も圏内の農村に成立。在方町の問屋も在郷商人も、江戸との取引が盛んになるに伴って、江戸の問屋との結合を強めたが、既成の流通組織から離脱して、直接江戸との取引を試みる者もあり、幕藩体制の商品流通組織を変質させていった</p> <p>※江戸に入荷する商品⇒京都・大坂方面からの下り荷、江戸に近い近国から送られてくる地廻り荷</p>
<p>世直し一揆と従来の百姓一揆との相違点</p>	<p>●代表越訴型一揆や惣百姓一揆…村々の百姓が幕藩領主に対して年貢減免などを求めるために起こした●世直し一揆…階層分化が進む状況のなか、貧農が主体となり村役人・豪農層に対して打ちこわしを行い、施行や質地の返還などを求めた●世直し一揆の背景には、幕府崩壊により貸借関係も破棄されるという徳政意識が存在した。</p> <p>※主な世直し一揆……郡内一揆・加茂一揆・三閉伊一揆・信夫・伊達郡の一揆・武州一揆</p>

<p>江戸時代のマニファクチュア経営と絹業・綿業の開港による影響</p>	<p>●17世紀からの伊丹・灘の酒造業、19世紀からの大坂周辺や尾張の絹織物業、西陣・桐生・足利の絹織物業、川口の鋳物業など</p> <p>★絹業⇒【繭生産の養蚕・生糸生産の製糸・絹織物生産】の3つの工程による地域的分業★</p> <ul style="list-style-type: none"> ●絹織物業…京都西陣(織屋が高機を用いて女性労働者の分業で高級織物を生産)の技術を受容して地方もが発達し、とくに桐生や足利ではマニファクチュア経営も成立したが、開港による生糸輸出の開始で絹織物部門では原料糸不足、価格騰貴などで破壊的な打撃をうけた。 ●養蚕・製糸業…発展の好機をつかみ、開国により従来の手挽・胴繰に代わって座繰が中心となり、長野・山梨などで一部にマニファクチュア経営が出現 <p>★絹業⇒【綿花生産・綿糸生産・綿織物生産】の3基本工程による、地域的分業関係★</p> <ul style="list-style-type: none"> ●綿織物生産…大坂周辺や尾張などでマニファクチュア経営が発生していた。開国による綿織物輸入で打撃を受けたが、輸入綿糸を原料に転換することで新たな発展を模索し、綿糸の輸入が急増 ●綿糸生産…紡績機械製の綿織糸が糸車による手紡糸を圧倒して大きな打撃 ●綿花生産…南北戦争時に日本綿花が輸出品となったこともあり、雑用綿市場も拡大して綿糸生産よりは打撃は軽微 <p>※綿糸布の輸入⇒賃機や手紡・綿打ちなどの副業や綿作によって現金収入を得て生活を維持してきた農民たちは没落の道へ歩み、土地を手放したり賃金労働者や小作農にならざるを得ない人々が増加した。</p> <p>※綿製品輸入は農民の衣料品自給生産を縮小させ、商品経済を農村に浸透させ、農民層の分解を促進させた⇒自給的経営の解体と農民の土地喪失が促進し、封建制社会の経済基盤が崩壊しつつあった</p> <p>※資本制社会の形成に不可欠な原始的蓄積である「資金、賃金労働者」の蓄積、特に後者の蓄積が開港を機に急速に展開</p>
<p>1860年頃から西陣や桐生での絹織物生産が急減した理由</p>	<p>●貿易開始で、生糸が生産地から開港場へ直送されて大量に輸出されたため、国内の絹織物業地は原料の生糸不足</p>
<p>上記が1870年代に回復した理由</p>	<p>●手織機の改良に伴って生産能力が著しく向上し、また文明開化の風潮とインフレ下で製糸業が発達し、豪農層が成長したことを理由として生産は回復</p>
<p>貿易当初の日本の生糸の世界的重要性</p>	<p>●最大の生糸消費地であったヨーロッパでは蚕の病気が長期間蔓延していたため生産量が落ち込み、最大の輸出国であった清からの輸出量がアヘン戦争や太平天国の乱の影響により減少していたため、開国したばかりの日本の生糸は注目された。</p>
<p>直輸出とは</p>	<p>●居留地貿易で生じる不利益に対抗して貿易の実権を取り戻すことを目的として、内国商が輸出取引上の基本的な責任を負い、輸出品を直接外国に輸送・販売する貿易形態 ●97年には生糸直輸出奨励法が公布されたが、米英をはじめ内外の反対が強く、廃止</p>

1865年～1867年にかけての日本の貿易のありかたの変化

●輸出の大半が生糸であったため、国内に品不足が生じ、日本の生糸価格が高騰●ヨーロッパの養蚕業が復活して需要が減少したことにより輸出が激減●改税約書により輸入関税が大幅に引き下げられて輸入が増加●第二次長州征伐での幕府の敗退による政治不安を背景として長崎港から諸藩が武器や艦船を輸入●貿易は急激に輸出超過から輸入超過に転じた